

免疫とは

正常の人間の体には、外から入ってきた、自分とは異なる異物を排除しようとする仕組みが備わっています。この仕組みのことを「免疫」と呼んでいます。たとえば、細菌やウイルスなどの病気の原因となる微生物が体内に入ってきたときに、人間の体はこれらの微生物を抑え、病気になるのを防ごう、あるいは病気を治そうとするのが代表的な例です。「免疫」の仕組みは、いわゆる「自然治癒力」と呼ばれるものの大きな部分を担っています。

腫瘍と免疫の関係

体は細胞からできています。いろいろな臓器が各々の役割をはたすように、一定の規則に従って生み出された細胞により構成されています。

腫瘍とは、一定の規則に従って生み出される細胞が、突然、無意味かつ身体全体の調和に従わず、また本来の役割を果たさずに増える病気のことを言います。

いわゆる「がん」、は、このような役に立たない細胞が急激に増え、しかも他の臓器に転移をおこし、他の臓器の中に入り込んで増えたりしてしまった癌を手術で切り取っても体の中に残ってしまう可能性があります。また目に見えない小さな「がん」の細胞が再び増え、生命の危険をもたらす可能性もある病気なのです。

「がん」の細胞は、もともと自分自身から生じたものですが、免疫のはたらきはこのようながん細胞の力を弱めるのにも有効です。これを「腫瘍免疫」と呼んでいます。

腫瘍免疫には、血液中にあるリンパ球と呼ばれる細胞が重要な役割を果たしています。リンパ球が主役となって、がん細胞を壊し、殺してしまうのです。

がん細胞は遺伝子の異常により生じることがわかっていますが、つねに体の中で生じては、免疫の働きで消えてしまっていると考えられています。生じたがん細胞すべてが、病気としての「がん」として大きくなってゆく訳ではないのです。病気としての「がん」となるのは、体内に生じたがん細胞のうち、小数部分であろうと考えられています。

がん細胞が生じても、大部分は腫瘍免疫の働きにより、育つ前に退治されてしまうのです。

がん免疫細胞療法とは

がんの治療法には、現在、手術、化学療法、放射線療法などが主に用いられています。がんが早期で、まだ小さいうちは、手術で完全に切り除くことが可能であり、がん治療の主体となっています。がんが身体の一部にとどまっており、転移していない状態ならば放射線療法が有効だと考えられています。化学療法も、癌の種類によっては効果を発揮し

ます。

ある程度進行してしまったがんの治療は、手術を中心にこれらを組み合わせて行われているのが第一選択であると考えます。がんの治る可能性は、治療法の進歩により年々増大していますが、進行してしまったがんでは、再発や転移などで命を落とす人の数は決して少なくありません。

がん免疫細胞療法は免疫の仕組みをがんの治療に役立たせようとするもので、免疫を担う細胞を体の外で増やし、再び体の中に戻してやることにより免疫力を高める方法で他に治療法が認められない患者に行うことによって、がん進行の遅延、痛み緩和等が期待できる治療方法なのです。

がん免疫細胞療法の副作用

いくら上記の効果があっても、副作用が強くては治療を行うことは難しいと考えます。この点では自己活性化リンパ球を用いるがん免疫細胞療法は優れています。自分のリンパ球を自分自身に戻すのですから、大きな副作用が少ないのが特徴です。しかし考えられる副作用としては以下のようなもの存在します。

- ①頭痛
- ②アレルギーによるショック症状
- ③感染症
- ④点滴刺入部の発赤
- ⑤熱感

の可能性がります。

これらの副作用と効果をよく理解しこの治療を受けるかどうかを考慮すべきなのです。